
ハッピー・サマー・ウェディング（前編）

茶山ぴよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハッピー・サマー・ウェディング（前編）

【著者名】

茶山ひよ

N5002C

【あらすじ】

中学時代に自分の代わりにイジメ受けた友達・まさみを見捨ててしまつた萌。10年経つて、会社の王子様・徹をいためた萌は、女性社員から受けるイジメに必死で耐えていた。徹との結婚も決まつたある日、萌のもとに奇妙なメールが届く。夏ホラー2007参考作品です

(前書き)

夏ホラー2007 参加作品です

突き刺す太陽光線に瞳孔が麻痺したように、真っ暗な更衣室。

サウナのような暑さ、濡れた水着から充満する塩素の臭気。

暑い暑いとわめきながら、そこから真っ先に出てきたのはギャル系の女子だった。

数が限られているシャワーを、彼女たちが真っ先に使う暗黙の了解が生徒の中にできていた。

……坪井まさみは、一番最後に、ひつそりとシャワーを浴びていた。更衣室にはまだ生徒たちが残っているのに、誰も、まさみには声をかけない。

まさみも……もはやそんなことは諦めたように、濡れた水着のまま、スポーツタオルで髪を拭きながらシャワーからあがる。

更衣スペースの四角く区切られた木の棚の前にやつてきたまさみは無言のまま異変に気づいた。

棚に置いたはずの、自分の制服が……下着も、バスタオルもない。

「そ。

まさみは血相を変えて、棚中を見て回った。すでに、みんな着替え終わっている。すべての棚に衣服らしきものが入っている気配はない。

い。

まさみは、水着のまま這いつぶばつた。

スノーコの下に落ちてないか、洗面スペースの下のバケツに突っ込まれてないか、ゴミに捨てられてないか。

残っていた生徒たちは、そんなまさみに声を掛けることもなかつた。

ただ氣の毒そうに、必死で探すまさみを見るだけで……誰も、タオル一つ貸さうとはしなかつた。

「あいづら」が怖かつたから。

まさみはついに、水着のまま、更衣室を飛び出した。

すでに10分休憩になつていたので、水着のまま裸足で校舎の廊下を走るまさみは、とても目立つた。

よつやく教室にたどりついたまさみの目に飛び込んできたのは……。

『忘れ物』

とこづラクガキと共に、黒板に貼り付けられた下着。

教室には……そこを更衣スペースに使つていた男子がほぼ全員残つていて、水着姿のまさみに一瞬注目が集まり……しかし大半は気まずそうにそっぽを向いた。

まさみは無言で脱兎の「」とく黒板に近寄ると、画びょうで止めてあ

つた自分の下着を素早く取つた。

しかし制服は「」にもない。

なおも教壇の下をのぞきこむまさみに、壁際に座り込んだ、髪を赤く染めた男子から

「水玉パンツカーフーイイ~」

とヤジが飛ぶ。続いて机の上に腰パンの足を投げ出した細眉の坊主頭から

「坪井サン、パンツ忘れちゃいけないでしょ」

とバカ声が起きて、たむろしていた数名の男子からひやつひやつひやと下品な笑いが起きた。

すでに教室に戻つてきていたギャル系が、そんなまさみを見て、くすり、と笑う。

「バカじやん。教室にあるはずなのに」

「ちょー、萌、おかしーよね」

ギャル系のリーダー格・宇佐見ナナが、わざわざ傍らに寄つてきて萌の肩を叩いた。

萌は笑えなかつた。笑うはずがない。

だつて、まさみは、小学校からの友達だから。

そして……ついーか円前まで、女子に無視されていたの萌のまづ
だった。

あこつ（まわみ）としゃべつたら、あんたがあこつと回し皿こ
あつとだよ。

萌は「ねー」と笑いかけながら威圧してくる宇佐見ナナとの取り
巻きが怖い。

まさみりちゃん、いめん。

下着を握りしめたまま、なおも必死で制服を探しまわるまわみ。

それをとも楽しみつゝ……高見の見物を決め込む宇佐見ナナらの前
で……萌ができる抵抗といえば、次の授業の宿題をやるふりをして、
まさみのまづを見ないことだった。

萌はシャーペンを握りしめながら心で叫んだ。

「めんね、めんね。まさみりちゃん。何もできなくて、いめん
ね。

至近距離に、徹さんの整った顔があった。

「萌、びついたの？」

よかつた。夢だつたんだ。

「うなされてたよ。大丈夫?」

こんなとき、むしろいつちの世界のまゝいそ夢かも、と私はときどき信じられなくなるときがある。

だけど……頬に触れた徹さんの指の温かさと、カーテンの隙間から差し込むきついた朝日と、よつやく安心できる。

徹さんの整つた目が、私を映して優しい形になつていて。

私は、そつとうなづくと、彼の胸に頬を寄せた。

この夏に、徹さんと結婚できるなんて、私はまだ信じられない。

そんな幸せが訪れるなんて、あの悪夢のような10年前からみれば、考えもしなかつたことだ。

「甘えんぼだな。……でも、もう起きなきゃ、一人揃つて会社に遅れちゃうよ」

「7時20分かな

「……今、何時?」

「うそつ

私は飛び起きた。

9時の出勤には、8時に出ないと間に合わない。

今から朝ごはんをつくりていいる余裕はない。

「いいよいよ、マックで朝は食べよう。それでいいじゃん

徹さんは笑いながらバスローブをはおつてベッドを降りると、カーテンをあけた。

初夏のきつに朝日が、まだベッドの上にいる私に射して、思わず田を細める。

安心した私は、大きく伸びをし……携帯の点滅に気付いた。

メールが着信している。

タイトルなし、見覚えのない発信元に、かすかに不吉な予兆があつた。

♪スグ別れないと死ヌ

私は息を飲むと、メールを閉じた。

「あーーら、大久保君に青山さん」

マクドナルドから出てきたところを、同じ職場の先輩、野上恭子に目ざとく見つけられてしまった。

会社の最寄駅近くのマックだから仕方ないといえばそうだが。

ちなみに彼女は徹さんと同期、つまり6年先輩だが、短大卒だから私より4つ年上だ。

「月曜から一人揃つて朝マック。仲がいいわね」

「冗談の皮をかぶりつつも、私に投げられる野上の視線はとても冷たい。しかし徹さんは

「うん、仲いいよ」

と澄ましている。「」んとき私はとても気まずくて、どうしていいかわからなくなる。

あまつさえ、今朝の徹さんはご機嫌なのか、野上の前で無邪気にのろけてみせるべく……私の肩に手を乗せてぐいっと引き寄せた。

それと同時に野上の眼がピカッと光るのを見てしまい、私はぞくつとした。

あとで何をされるかわかったもんじゃない。

制服を身に着ける前に、私は念入りに肌にあたる部分や腰を点検する。

タグに隠れてカミソリがないか、お尻の部分が裂けていないか…なんでそんなことをするのかといえば、

それは、私が職場でイジメにあつているからだ。

配属してまもなく、同じ職場の先輩である徹さんにドートに誘われてからだから、もう1年も続いている。

裏でイジメの陣頭指揮をとっているのは、おそらくあの、野上である。

背が高くてイケメン、そして誰にも優しく、仕事ができる徹さん。

それだけでも女性社員に人気があつて当然なのに、さらにはこの会社の専務の息子で、大物国會議員の甥にさえあたる彼は、私が入社する前からみんなが狙っていたらしい。

そんな、言つてみれば会社の王子様の彼が、私にまっすぐに近づいてきた時、私は嬉しいよりもとまどつた。

私はそれほど美人というわけではない。

「萌ちゅあんは、キレイ系とこよりカワイイ系だよね」

といつてくれる友達もいたけれど、つまりは私の姿は「」く普通といふことだ。

女としてきわめて平凡な私に、男として極上の徹さんが「」えられた。そんな大幸運のかわりに、私は同僚や先輩の女性社員から執拗なイジメを受けることになつたのだ。

会社という場所で、女性社員に総スカンを食つといふことは、生きる術を奪われるに等しい。

特にうちの会社は古い体质で、男性が営業、女性が営業事務と業務が男女で分断されている。

それゆえに私への仕打ちが徹さんをはじめとする課内の男性社員に気づかれることはなかつた。

いや、気付かれても困ると私は必死に耐えて、ひたかくしにした。

隠しているうちにイジメはこの1年の間にどんどんエスカレートした。

着替えの服をこいつそりと破かれたり、帰りの靴を隠されたり、椅子を壊されて尻もちをついたり。

コンパクト型の化粧品がいつのまにか粉々になつている」となび曰
常茶飯事。

長い会議の前に生理用品を隠されて、血でスカートを汚してしまつたこともある。

そんな個人的な攻撃はもちろん、一斉同報メールがなぜか私のところにこなかつたり、仕事の資料を隠されたり、あげく勝手に削除されたり、大事な電話が来たことを教えてくれなかつたり。

そういうのはすべて仕事の失敗につながるのが、一番つらい。

徹さんと、「この8月に正式に結婚する」とが決まったこともあり、最近はさらにひどくなつた。

でも、私は徹さんにイジメの事実を話さなかつた。

告げ口や反撃をしたら、徹さんに軽蔑されてしまうかもしれない。

だいたい社内でイジメられている事実自体、できれば知られたくない。

徹さんに嫌われたくない一心で、私は耐えることを選んだ。

制服に着替えて私が席に着いたときには、徹さんはリーダー席で、

すでにパソコンと首っぽきになっていた。

始業前にメールチェックを終わらせ、返信が必要なもののは片づけてしまつのが彼のやり方だった。

仕事中の彼はいつそうカッコいい。私は一瞬見とれた。

「青山さん、今田一〇時からのコーダー会議の資料でいいる?」

ふいに徹さんが顔をあげて私に問いかけた。

何のこと? そんなの聞いてない。

「あれー? 金曜日にメールでお願いしなかつたつけ? 野上さんと一緒に」

あわてて私はメールボックスをスクロールさせて該当メールを探す。

そんな私をよそに、隣の席の野上は

「はい。営業企画書は私に、金曜3時までのデータ集計は青山さんについて確かにメールで受け取りました」

と勝ち誇ったように答えて、

「ほり、じじじで來てる。金曜、15時28分」

と自分のパソコン画面を指差す。でも私のところはそんなメールは着てなかつた。

「やつてないの？」

徹さんがやや不機嫌な声になる。

「しかたないな。野上さん、手伝つてあげて。10時……いや10時15分でもいいから間に合わせて」

「はーい」

といこながら、野上さんは私を横目でじらむと、

「どうせ間違つて消しちゃつたんでしょう。退職までは気を引き締めてもらわないと困るわ」

と正論を突き刺した。

違う。私は消してなんかいない！

すぐ悔しかつたけど、すぐにデータ集計をすべくEXCELファイルを開いた。

そのとおり画面の隅にメールの着信の表示。徹さんからだ。

♪披露宴の数合わせは忘れないでね。忘れんぼさん(> - <) /

徹さんからだつた。

忘れたわけじゃないんだけど……と一瞬くすぶつた不満は、最後の

顔文字に書き消された。

いいわけばかりするやつと思われたくない。

私はちらりと彼を盗み見た。

徹さんはちょうど課長に何かを報告すべく立ち上がったところだった。

でも私の視線に気が付いた証拠に口角が少し上がる。

そんな一瞬、私は全部我慢できる気がしてしまったのだ。

だけど……メールを見直した私は、気が重くなる……披露宴の招待客のことだ。

披露宴。

最近の私の、一番の悩みだ。

政治家と親戚の名家でかつ、専務の息子だから仕方ないのだが……、結婚が決まった時、披露宴は正式にきちんとしなくてはならないと徹さんに言い渡された。

しかも招待客は徹さんサイドだけで200人を超すらしい。

親類だけでなく、明るい性格の徹さんには友達がとても多い。

私はといえば、内氣でただでさえ友達は少ないほうだ。

それでも、日頃それほど交流のない親戚全員と大学時代のゼミ友、サークル友達、高校の同級生、それから唯一の習い事であるお茶の友達とせいいっぱい声をかけた。

それでようやく30人になったと、徹さんに昨日報告してため息をつかれてしまった。

「80人くらい……、うーん、最悪でも50人はそっちでも集めてくれないと、席のバランスがとれないよ」

と徹さんはめずらしく少し口を尖らせた。

「営業1課の女性陣は萌に割り当ててあげただろ」

同じ職場の男性陣は徹さんが、女性陣は私が招待することになつていい。

だが……私はそのほぼ全員に断られていた。

ちなみに結婚式と披露宴の日取りは8月12日に設定している。

夏休み2日目といつも口、会社のみんなは

「あらざんねん。夏休みだからハワイにこへりとこへりの」

「あたしは温泉」

「あたしは北海道」

と判で押したように欠席に丸をつけた返信用紙を手渡してきた。イジメ相手の披露宴なんかに行くはずもない。当然といえば当然である。

「もう一度、会社の人に頼んでくれない？」

徹さんはそう言つたけど絶対無理だと思つ。

私は、押入れの中の整理ボックスから中学の卒業アルバムを出していた。

中学時代の友人は、ほとんど高校で別れ別れになり、たしか同窓会も成人式の年に1回あつたきりだつた。

だけどそのと、『また会おう』と盛り上がっていたことを覚えている。

同窓会がわりにと招待すれば、誘い合つて来てくれるかもしねり。

私は中学時代の友人、池田サキ、北野沙織、長尾藍に順番に電話をかけてみることにした。

ちなみに成人式の時に交換した携帯番号は、4年もたつてゐる」と
もあり、とつぐに使われていなくなつてゐた。

実家にいるといつてゐた池田サキを選んで、電話をかける。

電話には彼女のお母さんらしき人が出て、一瞬なんと説明すべきか
迷つ。

「あの、お久しぶりです。中学の時にサキさんと同じクラスだった
青山といこますが……」

「ああ……」

普通ならここで氣を利かせて本人に代わるだろ？

しかし、お母さんは、いつも受話器を握りしめたまま、絶句してい
る感じ。

「あの、サキさんはいらっしゃこますでしょつか？」

「あの」は……サキは2年前に亡くなりました

「うそ。そんなの聞いてない。

驚きのあまり、私が絶句する番だつた。

「交通事故で……」

悲しみがまだ生々しいらしく、サキのお母さんの声はだんだん引き

絞るよつた声に変わっていく。

あまりに驚いて、そのあと何と声を掛けて電話を切ったか覚えていない。

いまさらのおくやみを述べるのはひどく骨が折れたよつた気がする。

中学の時の同級生が、24歳にして『もつすでに一人』、いない。

いや。

私の目の前に、フラッシュのように思い出が蘇る。

まさみちやん。

私は目の前の映像をむりやり振り払うと、その次、北野沙織に電話をかけてみた。

あいにく留守だった。私は要件ができるだけ丁寧に録音に残した。

もう一人、長尾藍。

たしか彼女は、成人式の時、東京の大学に進んだと話していたから、実家にはいないかもしれない。

だけど事情を話して携帯番号を教えてもらえればそれでいいやと電話をかける。

「もしもし……。中学の時に藍さんと同級生だった青山といいます。夜分すいません」

「いいべ」

硬い感じの男性の声は、藍の父なのが兄なのがよくわからない。

「ひこひ声は苦手だけど事件は伝えるべきだろ。」

「あの……寒は、このたび結婚することになつまして、それで……藍さんを披露宴に招待したいと思つて……それで藍さんの連絡先を」

「藍はもひこません」

また。飲んだ固唾が口内によつて、心臓がびくつと打ち始める。

「3年前に、母と一緒に交通事故で死にました」

それでよひやへ、ひのひけんどんな男性が藍のお兄さんだとわかつた。

「ひ……ひそな偶然があるだひつか。

打ち始めた心臓は、体全体を震わせやうになる。

何て言えばいいのかわからなくて、でも言葉も見つけることすらできなくて……そんな私の携帯にプツプツと翻り込み音が入った。

画面を見るとひわひわ留守だった北野さんの実家の番号だ。

藍の兄さんは、かなり一方的に電話を切ってくれた。

私は震えが止まらない手で通話ボタンを押す。

さつと沙織が、掛け直してくれたのだろう。

「もしもし」

自分の声が震えていることに気がついて、私は大きく息を吸い込む。

「青山さん？ 久しぶりねえ……」

沙織本人ではなく、お母さんの声。そういうえば北野沙織の家には2～3回遊びにいったことがある。私はあいまいに返事をした。

「『』結婚されるのね。おめでとう」

「あつがと『』れこまわ」

私は答えながら焦りがジリジリとつま先からやつてくるのを感じた。

沙織を招待したいとは留守電に残したはずだ。だったら沙織本人が掛けなければ、てつとう早いのに。

それをしないのは……。すでに私は嫌な予感にわざと畠をそりしていた。

「あの沙織さんは……」

「それで実はね」

つい同時に声を出して、一瞬沈黙が漂う。

「沙織はね……もういないの」

息が喉で凍りつく。

中学時代に仲が良かつた3人がみんなすでにこの世にいない。

偶然だらうか。

私はいてもたつてもいられなくて、卒業アルバムから3年の時にクラスをまとめていたひょうきんもの加藤優太くんに電話をかけることにした。

幼稚園が一緒だった彼は学校のいろいろな噂に詳しかった。成人式のときも欠席者の近況などを話してくれたはずだ。

「青山さん……元気でよかつた、懐かしいなあ」

優太くんの開口一番セリフに違和感を感じた。

『元気でよかつた』なんて、まるで元気じゃないことを心配しているような口調じゃないか。

だがまでは、要件を伝える。

「いいよ。2次会の会費程度でいいなら10人くらいは集められる

よ

披露宴の人集めを軽く引き受けてくれた優太くんに私は手をあわせたくなった。

それでお互い軽く近況報告をしたあとで、私はさつきの『元氣でよかつた』について蒸し返してみた。

ああ、それそれ、と彼はため息とともに吐きだすよつに言つた。

「青山さん、2年のときは4組だったよね」

2年。

『』とり、と心臓が動き出す。

「う…うん。 ただけど？」

結構噂になつてゐるけど、と前置きをして彼が話し出した事実に、私は思わず息が止まつた。

なんと、2年4組の女子のうち8人がすでにこの世の人ではないと
いう！

優太くんはさらことじめを刺すべく

「一番最初は、高校に入つて自殺した坪井まさみつて『なんだよね

といった。頭を殴られたような衝撃。

「それ以来、事故や事件で次々と死んでいくんだ……。いやー人、なんとか命が助かつた人がいたか」

「それ誰」

「宇佐見って、すっげーカワイイけど意地悪いギャル系いたじゃん。あの「」、去年顔に劇薬ぶっかけられて、一度と人に会えなくなつたんだって」

宇佐見ナナはまさみイジメの首謀者だった。

「じゃ、4組だつた青山さんこ聞きたいんだけビ」

「な、何?」

思わず声がうわざつてしまつ。

私は、私は何もしていない。何もできなかつたけど何も加担していない。

言い訳が耳元でこだまするようだ。

「その坪井さん、2年のときにひどいイジメにあつたんだって?」

ああ!

私は、携帯を持ったまま、頭を抱えた。どこからかまさみちやんの声がする。

『萌ちやんは何にも悪いことしないじゃん。何で無視するのー。』

2年最初に無視されていたのは私のほうだった。

まさみちゃんへのイジメは、正義感の強いまさみちゃんが、私への無視に対して抗議したことから始まったのだ。

私は何もしていない。……だけど何もしてあげられなかつた。

優太くんの問いに、私はからうじてうなづくしかできない。

「やつぱりそつかー。それでかな、坪井さんの呪いなんて言つやつもいるんだな、これが」

あの事件以来、交流を絶つたとはいえ、小学校から仲が良かつた私は葬儀に出席した。

祭壇の上にあつた、まさみの遺影がサブリミナルのように脳にフラッショする。

死人が……生きている人を呪い殺すなんて、果たして本当にありうるのだろうか。

電話を切つた私は……メールの着信表示を見つけた。

開く前からある予感があつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5002c/>

ハッピー・サマー・ウェディング（前編）

2010年10月10日22時50分発行